

「硫黄島からの手紙」

栗林忠道に見る『父親』

クリント・イーストウッド監督の「硫黄島からの手紙」の封切りに合わせたのだろうが、栗林忠道と硫黄島関連の出版が相次いだ。私は、「戦争もの」というだけで、見る気が失せるのだが、『硫黄島からの手紙』には、引きつけられるものを覚えた。一つは、栗林が

家族思いで、「手紙」には家族への思いが綴られていて聞いたからである。また、彼が私と同じ長野市の出身、高校（旧制中学）も同窓ということ。最後に、手紙が書かれた当時53歳と、同世代ということも大きい。地位や職を除けば、感情移入しやすいのだ。

べて「遺書」のつもりなのだ。

書き出しは、たいいてい「私は相変わらず丈夫で過ごしています」で始まる。いつ米軍に攻め込まれるか分からない、その時には自分の命はないものと諦めることになる。「お父さんはまだ元気である」それこそ、最大のニュースだった。

子どもたちは、長男太郎が二十才、長女洋子は十六才、次女たか子はまだ九才だった。太郎の手紙（昭和十九年

十一月二日）。

「父が万一戦死をしてもお前達の生活を保証出来るだけの物質上の遺産は残してあるつもりである。つ、まじやかに暮らして行くなら決して母子路頭に迷う様なことはなく、立派に学問も修業もやって行けると思う。……」

お前が生まれて今日迄二十年であるが、父には一、二年にしか思われず、大小便の始末を母にして貰っていた有様から始終散歩に連れ歩いた幼童時代ですら尚昨日今日の様な気がするのである。父とし

てはお前の前途を見届け、確かに幸福の生涯に踏み出した所を見て取る迄生きたいのは人情だが、それは戦局と自己の運命と到底許されない。

どうか父なければ無き程奮起して貰いたい。では之で左様なら。呉々も自愛する様に。そして丈夫一方で暮らす様に。」

長女洋子へ（昭和十九年十月四日）。

「去る二十八日に二十五日附の手紙が着きました。洋子の手紙が同封してありまし

た。洋子の手紙は長々と色々書いてあってよく分かったけれど、文字の間違いが非常に多いのが何より欠点です。もう少し一心に国語の書き取りをやらないといけないでしょう。女の習字（間違いない字を書くことも含む）は男の数学の様に大切なものです。」

（このあとに十数個の誤字の添削あり）
東京から田舎の長野へ疎開していた次女たか子へ。
「田舎は涼しくなった暑くですが、こちらはまた暑くて閉口です。……こちらの空襲

たこちゃん！

信州の寒さは東京とは比べものにならない位寒いから、よほど気を付けないと風を引きますよ。寒いと思ったらあつ着をするがい、でしよう。

……たこちゃんは虫歯にはなりませんか？ 歯をよくみがく事を忘れない様にささい。歯をよくみがかないと虫歯になってとても苦しみま

す。

おなかはいけませんか？ おなかをこわして下痢をする時はおながすいてもがまんして御はんを沢山食べない様にするのが一番い、ですよ。

では之で左様なら。御母さんへは時々手紙を出さないよ。

十一月十七日 戦地にてお父さんより たこちゃんへ

細かく気遣いしていた父の心が分かる。印象に残るのは、妻義井に対して、お勝手の床下から吹き上がる寒風のことを心配している手紙（昭和十九年十一月二十八日）で

ある。

「それからまだ知らせを受けないが、お勝手の床板の間は塞げたであろうか？ 床下から吹き上げる風で冷え込む話はいつも聞かされ、何とかしてやるつもりでいて、

つついそのまま出征してしまつたので、今もつて気がかりであるから太郎にでも早速やらせるがよい。」（ルビは編集部）

同郷で十以上も若い妻を氣遣っている。

これらの手紙から、現代の父親が学べることはいくつかわかる。

・「仕事が忙しいから、家族のことは……」という言葉は、まさしく言い訳ではない。

戦争の最前線で二万の兵隊の総指揮を取っている司令官が、留守宅の家族の一人一人の生活と将来の心配をしている。

・家庭でも職場でも細かい目配りが重要である。

栗林は、硫黄島全体を馬ではなく徒歩で歩いて地形を調べ、持久戦に持ち込むために地下に要塞を作る作戦を立てた。そのため五日で落ちると思われていた硫黄島が一ヶ月以上持ちこたえ、米軍上陸から四日間で与えた損害は、ガダルカナルでの5ヶ月の戦闘に優るものだった。

・犠牲を払うリーダーは、士氣を盛り立てる。

生野菜の不足に悩む兵隊のために、あるとき内地からキウウリ、なす、トマトが大量に届けられたが、最高指揮官は自分の分を受け取ることを拒み、できるだけ多くの将兵に分けた。

「子は常に諸子の先頭に在り」とは、栗林が最後の総攻撃の前に出した電文のことばである。最後の様子は伝わっていないが、階級章をちぎりとって、最後の抵抗を試みたと言われる。



（左）栗林忠道『栗林忠道 硫黄島からの手紙』（文藝春秋社）1,000円（税込）



（右）梯久美子『散るぞ悲しき』（新潮社）1,575円（税込）（ファミリー・フォーラム・ジャパンでは扱っておりません）

は毎日昼と夜とにありますが、中々すこいものですよ。東京はもうじき空しゅうされる様になるかも知れませんが、たこちゃんの居る田舎は大丈夫だからいいですね。それだから何も心はいすることなく丈夫で元気で暮らさない。お母ちゃんへ中々手紙を出さないでしよう。お母ちゃんがそう言うて来ましたよ。之から時々出すようになさいね。お母ちゃんも安心するでしようから……。

では今日は之だけ。左様なら。風を引かないように元気で暮らさない。九月二十日認む 戦地 お父さんより

まだ十才になったばかりで親から離れて暮らしていた次女のことには一番気にかかったらしく、妻への手紙の次に、たか子への手紙が多い。前回から二ヶ月後の手紙。